

平成 30 年度
横浜市立高等学校
及び
併設型中学校
自己評価書

横浜市立横浜商業高等学校

<学校情報>

1 課程・学科 全日制課程 商業科・スポーツマネジメント科・国際学科

2 学校長 磯部 修一 (平成31年4月1日現在 在職1年目)

3 学校教育目標

本校は学則に則り、後期中等教育およびビジネス教育・国際理解教育を行い、他を尊重し自立精神を持つ個を育み、将来の社会人としてビジネス社会を理解し、問題解決能力と国際的視野を持つ豊かな人間を育てることを目標とする。

○商業科教育目標

生徒一人ひとりの能力に応じた個性を尊重し、経済のサービス化・グローバル化・ICTの急速な発展や地域産業の振興など起業家精神を身につけた人材の育成及び職業人としての倫理観・遵法精神などの育成への対応のため、力強く生きることができる資質を、体験的・実践的な活動を含めながら高め育てる。

●重点目標

- ☆ビジネス等の実社会で役立つ将来のスペシャリストやリーダーを育成する。
- ☆地域に貢献する即戦力としての人材を育成する。
- ☆教科指導や特別活動・部活動を通して全人教育・人柄教育を行う。

○スポーツマネジメント科教育目標

スポーツや健康に関する学習や実践的な活動を通して、科学的な知識・理解を深めるとともに、スポーツとそのマネジメントにかかわる能力を育てる。

●重点目標

- ☆地域における生涯スポーツ振興の担い手づくりと横浜におけるスポーツの活性化に貢献する人材を育成する。
- ☆スポーツや健康分野におけるビジネスの振興発展に貢献する人材を育成する。
- ☆将来の社会的・職業的自立に向けた資格や技術を習得した人材を育成する。

○国際学科教育目標

自主自立の精神を培うと共に、国際感覚、コミュニケーション能力及び問題解決の方法を身に付け、国際社会で世界の人々と共に生きる力を育てる。国際社会で共に生きるために、自己及び自国の文化を深く認識し、かつ多文化共生の姿勢をもてるよう国際感覚を育てる。

●重点目標

- ☆国際社会で共に生きるために、自己及び自国の文化を深く認識し、かつ多文化共生の姿勢をもてるよう国際感覚を育てる。

- ☆異なった文化の中でも積極的にコミュニケーションできる能力を育てる。
- ☆多様化する国際社会で主体的に行動するため、自ら問題を発見し整理し解決方法を追求し続ける能力を育てる。
- ☆教科指導や特別活動・体験実践活動を通して全人教育・人柄教育を行う。

4 教育方針

- 生徒の主体的な学びを支援し、「活力」「魅力」ある学校づくりを推進する。
生徒の興味・関心・意欲の向上を目指した指導方法の工夫を行い、わかる授業に取り組み、一人ひとりの生き方を踏まえた進路指導を推進し、課題解決能力の育成を図る。
- 新たなビジネス教育（経済のサービス化・グローバル化や ICT への対応、起業家精神の育成、職業人としての倫理観）や世界の人と共に生きる力を育てる国際理解教育を推進する。
- 国際的な視野に立った先進的なビジネス教育やコミュニケーション能力を身につけた国際社会に貢献しうる人材を育成する。
- 学校評価を実施し、絶えず問題意識を持って、学校教育改革を推進する。学校評価委員会を活用し、P 計画・D 実行・C 振り返り・A 行動 のサイクルで改善を継続させる。
- 第 2 期横浜市教育振興基本計画に沿って教育改革を推進し、Y 校としての商業教育の方向性を示し、また国際学科の一層の定着を図る。学力の全体的な底上げを図り、一人ひとりの進路希望の実現に責任を持つ。開設 16 年目を迎えた国際学科の振り返りを行い、
成長を図るとともに、ビジネスシーンをリードする人材の育成を目的とした YBC（Y 校ビジネスチャレンジ）クラスの実践と検証を行う。また、開設 5 年目となったスポーツマネジメント（YSM）科のより良い教育課程の編成に向けて、引き続き取り組んでいく。

5 教職員数（平成 30 年 12 月 1 日現在）

| | | | | | | | |
|------|-----------|-----------------------------|-----------|------|----------|-----|----------|
| 学校長 | <u>1</u> | 校長代理 | <u>1</u> | 副校長 | <u>2</u> | 事務長 | <u>1</u> |
| 教諭 | <u>66</u> | （男 <u>46</u> 、女 <u>20</u> ） | | 養護教諭 | <u>2</u> | | |
| 実習助手 | <u>2</u> | 事務職員 | <u>4</u> | 技能職員 | <u>3</u> | | |
| AET | <u>3</u> | 非常勤講師 | <u>14</u> | 管理員 | <u>6</u> | | |

（防災員 2 名含む）

6 生徒在籍数（平成 30 年 12 月 1 日現在）

| 年次（学年） | 学級数 | 男子 | 女子 | 合計 |
|--------|-----|-----|-----|-----|
| 1 | 7 | 112 | 166 | 278 |
| 2 | 7 | 122 | 152 | 274 |
| 3 | 7 | 111 | 162 | 273 |
| 合計 | 21 | 345 | 480 | 825 |

7 回収率

| | | 依頼数 | 回答数 | 回収率 |
|-----|----|-----|-----|--------|
| 教職員 | | 72 | 72 | 100.0% |
| 生徒 | 1年 | 278 | 274 | 98.5% |
| | 2年 | 274 | 260 | 94.8% |
| | 3年 | 273 | 247 | 90.4% |
| | 合計 | 825 | 781 | 94.6% |
| 保護者 | | 825 | 683 | 82.7% |

8 自己評価実施日

| | |
|-----|-------------------------------------|
| 教職員 | 平成 30 年 12 月 14 日～平成 30 年 12 月 19 日 |
| 生徒 | 平成 30 年 12 月 13 日～平成 30 年 12 月 25 日 |
| 保護者 | 平成 30 年 11 月 5 日～平成 30 年 11 月 19 日 |
| 地域 | 平成 31 年 3 月 7 日 |

9 集計・分析期間

| |
|-----------------------------------|
| 平成 30 年 12 月 3 日～平成 31 年 4 月 30 日 |
|-----------------------------------|

10 自己評価書の公表方法・時期

学校ホームページ上で、令和元年 6 月以降に発表の予定。

<自己評価>

1 第2期横浜市教育振興基本計画の推進状況

□魅力ある高校教育の推進状況

<商業科>

(関連アンケート番号：教職員 1、4、5、6、生徒 1、保護者 1、2、6、10)

| | |
|-----------|--|
| <p>取組</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・個性を伸ばす専門教育の推進を目指し、検定上位級取得による専門性の深化に取り組んだ。 ・高大連携や産学連携による取り組みを積極的に行った。 ・各種ビジネスコンテスト等への参加についても積極的に取り組んだ。 ・専門学校2校との連携により、日商簿記検定や販売士検定合格に向けての特別講座を実施した。また、公務員志望者に対しては公務員受験講座を開設し、民間企業志望者に対しては就職マナー講座を行った。 ・資格取得を目指すとともに、地域との連携を図り地域貢献し活躍できる人材を育成することを目的の一つとして、2年生の授業「課題研究」を行った。 ・3月に本校講堂で課題研究発表会を開催し、1年間の研究成果を1年生の前で発表した。 ・地域との連携として、「総合実践」において南区内の老人クラブとの交流授業を6月と9月の2回実施した。 ・専門教育の中学校・中学生およびその保護者へのPRへの取組として、学校案内やWEBページの改良を行った。 |
| <p>成果</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・全国商業高等学校協会1級3種目以上合格者は、40名（1級7種目1名、6種目2名、5種目6名、4種目9名、3種目22名）であった。ちなみに、29年度の内訳は1級8種目合格1名、7種目2名、6種目1名、5種目7名、4種目13名、3種目19名、合計43名であった。教科全体として、授業以外での検定対策や補習を実施した成果が表れたものとする。 ・「課題研究」における調査研究の一例として、「ドンドン商店街復活計画」や、株式会社丸加と連携した「横浜のスカーフの商品化を目指すプロジェクト」がある。また、「続YOKOHAMA HATSUプロジェクト」は、横浜の観光をテーマとして外国人観光客を横浜へ誘致する方策を考え実践するプロジェクトであり、株式会社旅工房と連携して活動してきた。 ・平成30年12月12日（金）1年生YBCクラスの生徒対象の横浜市立大学の授業見学会を行った。オリエンテーションの後、横浜市立大学の実際の授業を柴田(典)先生の「マーケティング論Ⅱa」と太田先生の「社会システム論」の二つに分かれ実際受講することにより、進路選択の実際のイメージを強化するとともに、現在自分の学んでいる専門学科科目がどのように大学でつながっているかを実感することができた。 ・高大連携による取り組みとして、関東学院大学、東洋大学、横浜市立大学と積極的に連携をとった。 ・YBC2年「課題研究」の授業においては、30年度は横浜市、横浜メディアビジネス総合研究所との産学連携により、SDGsの普及というテーマに取組み、そのアイデアを提示し講評をいただくという企画を行った。 ・同じくYBC2年「課題研究」の授業で行ったインターンシップにお |

| | |
|-----|--|
| | <p>いて、7事業所に計20名を受け入れていただき、ビジネスの現場実習を通じて職業意識の向上をはかり、商業を学ぶ意義を育むことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種ビジネスコンテスト等への参加については、「総合実践」のなかで日本政策金融公庫主催の高校生ビジネスプラングランプリの応募に取り組んだ。全国から396校の応募があり、14校選ばれる学校賞を30年度も受賞した。また、YBC3年の「総合実践」では、神奈川県生徒商業研究大会に学校代表として参加した。 ・老人クラブとの交流授業はお年寄りの方々に大変好評であり、また、生徒達のマナー実践の場ともなり良い体験となった。 ・3年商業科(2組～6組)の公務員志望者29名のうち、最終合格者は延べ30名、実数21名と、全国の商業高校のなかでもトップクラスの成果を出すことができ、商業科生徒の進路選択の幅を拡げている。具体的な最終合格先は、国家税務6名、国家一般(人事院、国土地理院)2名、刑務官1名、地方事務19名、消防1名、警視庁2名であった。 ・専門教育の中学校・中学生およびその保護者へのPRを目的に、学校案内やWEBページをより分かりやすくするとともに、随時WEBページを更新して最新の情報を発信するよう心がけた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習の時間が取れていない生徒が多いことが課題である。 ・全国商業高等学校協会主催1級3種目以上合格者数は県内トップであるが、更なる成果を出す必要がある。 ・「課題研究」の更なる充実を図ることが必要である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・入学時から家庭学習の習慣を身に付けさせる。 ・入学時から資格取得を奨励し、3年間を見通して計画的に上位級取得を目標とさせ、継続して補習対策も教科全体で取り組んでいく。 ・商業科全体として3年生の「課題研究」の内容を改善し、活きた商業教育実践を積み重ね、Y校商業科の魅力を発信していく。 ・実践室を多目的に利用できるような環境にし、個別学習やグループワーク、各種検定対策などを効率的に実施できるようにする。 |

〈スポーツマネジメント科〉

(関連アンケート番号：教職員1、4、5、6、生徒1、保護者1、2、6、10)

| | |
|----|--|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・外部機関との連携により理学療法士やアスレチックトレーナーを招聘し、授業や部活動のサポートをしていただいた。 ・外部機関との連携によりスポーツをビジネスとされている講師を招聘し、講演会や体験会を実施した。 ・外部機関との連携により外国人講師を招聘し、英語そのものやアメリカにおけるトレーニング事情のレクチャーを受けた。 ・3年の担任を進路指導担当者とし、進路指導の充実を図った。 ・簿記会計系の授業において検定上位級合格を視野に入れた授業展開に取り組んだ。 |
|----|--|

| | |
|-------------------|--|
| <p>成 果</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 外部機関との連携についてはアンケートの設問及び回答からは読み取ることができないが、生徒・保護者からはおおむね良好な反応を感じており、31年度も継続する。 ・ 指定校推薦での進学者は29年度よりも減ったが、28年度並みである。また、1，2期生が進学していない学校や、東京都・神奈川県以外の大学へ進学する者が増えた。行ける進路ではなく行きたい進路を実現するような進路指導の結果である。 ・ 全商簿記検定1級合格者はいないが、原価計算の科目合格者が5名出た。 |
| <p>課 題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 講演会や体験会では、生徒はじっくりと取り組むことができたようで得られたものも大きかったようである。なお、保護者も講演会や体験会に参加したいという意見があったため、保護者に事前告知するかどうかは課題である。 ・ 特に体育系の大学は推薦入試が少ないため一般受験利用者が多くなるが、一般受験に十分対応できる教育課程とは言い難い。スポーツ分野・商業科目も十分に学ばせたいことは言うまでもないが、進路実現の面では改善の検討が必要である。 ・ 全商簿記検定1級合格者は出なかったが、原価計算に5名合格したことは大きな成果である。その者たちが会計部門に合格すれば1級合格者数は過去最多になるので、部活動との兼ね合いで受験機会を増やすなど、顧問との連携が必要である。 ・ スポーツを「する」「見る」「支える」クラスであるという広報が上手くできておらず、生徒や保護者に対してミスマッチを起こしている状況があるようである。 |
| <p>改善策</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 講演会や体験会の計画を早めに立てることにより、保護者が参加できる内容であるかどうかの議論を早めに行う。 ・ 選択群を増やし、普通科目を学ぶ機会を増やせないか検討する。 ・ 専門学校の協力を得ながら、教員の基礎知識や指導力の向上を図り、生徒に提供できる授業の質を高める。 ・ 本科設置の理念を今一度情報共有し広報活動を複数の教員で行うことにより偏った情報提供にならないよう努める。 ・ 商業科目でスポーツビジネスについて学ぶ機会を増やし、スポーツ科学分野のイメージが独り歩きしないよう努める。 |

〈国際学科〉

(関連アンケート番号：教職員 1、4、5、6、生徒 1、保護者 1、2、6、10)

| | |
|----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none">・他校を招いて英語で行う学生会議 Y S F (Yokohama Student Forum)は、横浜市国際局との共催で実施し、30年度のテーマ「差別」について探究活動を行った。具体的には、日常的なディスカッションを行って意見交換をし、国際局の協力で南アフリカ大使館訪問、横浜市役所（人権担当）や国連開発協力との事前学習会を実施した。・修学旅行では国連日本政府代表部を訪問。国連で働くということの意味や高校生が取り組むべきことなど、生徒から書記官の方に具体的な質問があがった。また、修学旅行中に訪問する 911 博物館を題材に、授業の中で「平和」について考える時間を設定し、意見や考えを共有しながらTシャツをデザインし、New York の国連国際学校の生徒の前でデザインの持つ意味について英語で発表を行った。・2学年で思考力判断テストを導入。普段取り組んでいる問題解決型プロジェクトを通して、批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力が伸びているのかを検証。また、進路指導と思考力のつながりを今後の指導の中でどう役立てるかを計画していきたい。・海外交流事業では、台湾訪問と国連国際学校の生徒とネット上で事前に交流できるようにし、出会うまでに多くの情報を共有することで、「初対面」という心の壁が低くなり、限られた時間を有効に活用した。同時に、授業の中でも ICT を利用した教育の可能性を見出した。・Global Learning では、高大連携の取り組みとして、横浜市立大学の教員から評価助言をいただいている。3年間の探究活動のまとめとして、国際学科3年生の中から選ばれた生徒が研究内容についてプレゼンテーションを行っている。 |
|----|---|

| | |
|---|--|
| <p style="text-align: center;">成 果</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 林文字横浜市長が記者発表で「横浜の子どもたちがグローバルな視野を持って、持続可能な社会の実現に向けて行動し、自立して生きていく力を養ってほしいと願っている。」と述べ、Y S Fのような高校生会議への期待を表明しました。横浜市国際局の協力なしではY S Fの成功は考えられない。今後とも行政や国際機関との連携を継続して会を存続させていきたい。 ・ 修学旅行をより意味ある内容にするには、教科の中でも積極的に取り入れることで、学習の意味や理解が深まった。国連国際学校の生徒とより活発に交流する上で、30年度のようにテーマを決めて、お互いに発表や話し合いができると、アカデミックな交流にもつながると考える。 ・ 「問題解決」という言葉から、解決方法さえ見つければよいと思われがちになる。思考力に着目し、それを生徒が意識することで、PDCAサイクルをまわせる自立型学習者に成長すると期待する。今年は初めての試みであったため、振り返りだけで終わってしまった。 ・ 台湾研修では、参加生徒と受け入れ生徒の活発なやりとりがウェブ上で見られ、そのおかげで現地では趣味が似ている生徒を集めて交流をしたり、所属している部活動の選手と交流することができた。参加生徒からも「初めて会う感じがなく、スムーズな交流ができた。」と好評であった。 ・ Global Learning の発表会では、横浜市立大学国際総合科学部国際教養学系人間科学コースの高橋寛人教授に講評を行っていただいた。 1・2年生にとっては探究活動をする上での留意点などを学んだ。 |
| <p style="text-align: center;">課 題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 修学旅行でのTシャツプロジェクトは教員主導で提案した。生徒の中にはやらされている感を持つ生徒がいた。 ・ 思考力について考えたことがこれまでなかったようなので、実施時期を1年次に行うか、2年次の1学期に行った方が良い。 ・ 交流事業や進学指導で必須となるのが校内Wi-Fiの環境整備である。YYネットでは規制がかかり、生徒同士の交流や大学進学で提出が必須となるeポートフォリオなども紙媒体で生徒と教員がやり取りせざるを得なく、改善が求められる。 ・ 高橋教授から指摘された点は、仮説検証プロセスの中で、仮説の立て方や検証方法がつかめきれていなかったり、引用の仕方などが徹底できていない点が課題として残った。 |

| | |
|-----|--|
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業の中で行うプロジェクト型学習では、こういった発表形式にするか、評価方法をどうするかについて、生徒と相談して決めていきたい。 ・思考力判断テストは、大学入試でも導入されることから、1年次～2年次にかけて行っていきたい。 ・Global Learning では、3年次の取り組みが生徒主体で行われている。2年次からゼミ方式で指導教員をつけて、論文作成に関しては指導を入れていきたいと考えている。また、1年次より「探究と何か」「問いの立て方」など思考力を深めるワークショップや講演会を計画し、思考力スキルアップに向けて計画を練り直す必要があると考えている。 |
|-----|--|

2 教育活動の状況

□教育課程の状況

(関連アンケート番号：教職員 2、3、生徒 1、保護者 2)

| | |
|----|--|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態等を踏まえた特色ある教育課程の編成・実施を行う。 ・生徒が主体的に選択できる選択科目を開講する。 ・多様な進路実現に向けた教育課程・教育内容の改善を図るため、教育課程の効果的運用を図る。 ・新教育課程の編成にむけて、現行カリキュラムの反省・検証を行う。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・「希望する進路に進むために必要な科目や興味・関心を満たす科目が設定されていますか」(生徒 1) は、29年度の 85% から 83% と減少した。「本校のカリキュラム(教科・科目構成)は、お子さんの進路実現に役だっていると思いますか」(保護者 2) についても、29年度の 82% から 79% に減少した。これは、30年度も 29年度に引き続き、生徒の希望に即した選択指導が出来るよう選択科目調査を 2 回実施し、生徒が自らの進路と向き合う機会をより多く設けたのだが、科目の説明などが不十分だったのかもしれない。 ・大学入学共通テストに対応するための選択科目を設置した。29年度までのカリキュラム上の問題点をいくつか改善した。 |

| | |
|---|---|
| <p style="text-align: center;">課 題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・新2年生の選択科目にいくつか不成立の科目が出た。生徒の希望にできるだけ対応できる選択科目の開講が必要である。 ・30年度も3学期になってから大量の選択変更希望者が出てしまった。生徒の進路に即した科目選択を実現するため、現在の科目設定（選択群等）、設置学年、科目の内容等の問題点を洗い出し、改善する必要がある。また、進路指導部が中心となって、教育課程を編成する必要がある。 ・新教育課程の編成にむけて、商業高校として特色を出しつつ、一般受験や大学入学共通テストに対応できるカリキュラムの作成を具体的に始めることが31年度の課題である。 |
| <p style="text-align: center;">改善策</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・新教育課程の編成に向けて、現行カリキュラムの反省・検証をふまえながら、カリキュラムを作成する。 ・本校には4つのカリキュラムが存在する。学校全体で選択科目の精選や選択群の見直しを進める。特にスポーツマネジメント科や国際学科については、経営会議と連携しながら、選択群の見直しを検討する。 |

□教科指導の状況

（関連アンケート番号：教職員4、5、6、生徒1、保護者1、2）

〈教務部〉

| | |
|---|---|
| <p style="text-align: center;">取 組</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・学習活動における基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、一人ひとりの力を最大限に伸ばし、進路実現に繋げていくための指導方法の工夫・改善を図る。 ・幅広い視野や教養を身につけるため、主体的・意欲的に学習活動に取り組む態度を育成する。 ・家庭学習の習慣が身につく教科指導や、放課後・休業期間等を活用した教科指導を継続して行う。 ・各学科における検定等の取得、英語力の向上に向けて、きめ細やかな指導を充実させていく。 |
| <p style="text-align: center;">成 果</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・職員対象項目である「生徒の実態に応じて、指導内容や指導方法を工夫してわかりやすい授業を行っている」は90%を超え、教員側の自己評価は高い。（教職員5）。また、保護者の対象項目である「本校のカリキュラム（教科・科目構成）は、お子さんの進路実現に役だっていると思いますか」が約80%であり、一定の成果は上がっている。 |

| | |
|-----|--|
| 課 題 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態にあったきめ細かな指導をさらに進めるとともに、授業方法・授業内容の工夫と教科指導力の向上を図る必要がある。 ・生徒が達成感を得られるよう、細かな目標設定や生徒が取り組みやすい環境を提供するなどの工夫を行う必要がある。 ・生徒が主体的に学べる工夫をするために授業公開や研究授業などを積極的に行い、教員相互の意見交換や情報共有を行う必要がある。 ・検定試験の受験指導（補習を含む）や家庭学習の習慣化の推進、部活動生徒の学習時間の確保などが課題である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・多くの職員が部活動の顧問を担当している現状にあるため、検定試験の受験指導等の時間確保が難しい現状にある。生徒の興味・関心・意欲の向上を目指したより一層の授業改善と創意工夫を図り、わかる授業、生徒が自ら学ぶ授業を実践することにより、学力及び学習意欲の向上につなげていく必要がある。 ・勉強と部活動の両立を目指す生徒も多く、時間を有効活用させるためにも生徒に対する学習方法のガイダンスを充実させ、学習の見通しを持たせながら学習を進め、情報の共有、教科間連携の強化など、学校全体で学習環境を整え、学習する雰囲気をつくる必要がある。 ・家庭学習の習慣化を図るため、課題の提出（回収）方法、課題に対する評価等を工夫していきたい。 |

〈国語科〉

| | |
|-----|--|
| 取 組 | <ul style="list-style-type: none"> ・主体的に生徒が授業に取り組めるような授業を行った。 ・それぞれの習熟度や進路希望を考慮したクラス分けや、授業を展開した。 |
| 成 果 | <ul style="list-style-type: none"> ・3年では必修の現代文での2クラスを3分割することによる従来よりもきめ細やかな指導を行った。 ・国語表現では進路希望を考慮に入れたクラス編成を行い、なおかつ少人数での授業を展開することによって、一人ひとりの進路が実現する手助けをした。 |
| 課 題 | <ul style="list-style-type: none"> ・1、2年の授業におけるきめ細やかな授業。 ・大学の一般受験に対応できる国語力を広く身に付けさせていくこと。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・31年度より2年の商業科の選択科目に古典を置くことにより、30年度よりも、生徒の進路実現をかなえるための体制を作る。 |

〈地歴公民科〉

| | |
|-----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> 教科書の内容を中心に、基礎的な知識を習得させるとともに、多面的な視野が持てるように、各科目担当が打ち合わせをしながら授業を進めた。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> 生徒の授業評価はおおむね肯定的であるが、授業目的が単なる知識習得ととらえて、多面的な視野の価値への理解につながらない生徒もいた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> 教科書程度の基礎的知識の定着や、より主体的で多面的な視野の習得が求められる。また、「倫理」や、商業科の生徒は受験に対応できる「B」科目を学べる機会がない点も解決が必要である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> 主体的で対話的な深い学びにつながるように、より授業改善を進めていく。それとともに、分割授業などの導入や、学校全体のカリキュラムの見直しも進めていく。 |

〈数学科〉

| | |
|-----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> 継続して主体的・対話的で深い学びの実践が行えるような授業展開に取り組んだ。 コンピュータを使用するの図形分野の授業展開の準備。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> 生徒一人ひとりが自ら問題に取り組むような工夫をして、何をしていたのかわからずに、授業中に静かにして座っているだけの生徒が少なくなった。 図形分野特に、空間図形では図を黒板に書くのも難しく、それがコンピュータにできることでより多くの生徒の理解へとつながった。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> 教授したい内容と授業時間数を比較したときに、時間数が足りなくなってしまう科目があり、31年度以降、工夫が必要である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> 教授内容を精査し、メリハリをつけた授業展開を行うことでねらいにそった授業展開を実践していく。 |

〈理科〉

| | |
|----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> 29年度に続き、ディスプレイ機能の強化に取り組んだ。 1学年必修「科学と人間生活」の内容を本校の進路希望に沿うよう、改良した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> 生物の連続観察に対する生徒の態度は改善された。安らぎの場としての機能に加えて、変化を見つけ出す能力開発効果もみられた。 物質の分野では独自補助教材全体を改訂し、教科書の百科事典的記述に潜む自然科学の探究と数理的処理を体験させた。物理分野では実験をさらに充実させ、実験の奥深さを体験させた。 入学時理科不得意傾向の学校で、生徒授業評価は十分なレベルである。 |

| | |
|-----|--|
| 課 題 | ・30年度の傾向として、始める前から「わからない」と言い出す生徒が急増してきた。 |
| 改善策 | ・引き続き「入学できた生徒にわからないような内容は扱っていない」、理解できると信じて取り組めば「できる」ことを指導していく。 |

〈保健体育科〉

| | |
|-----|--|
| 取 組 | ・体育授業の安全に配慮した活動。昨年度に続き「体づくり運動」「体育理論」の計画的実施。 ・スポーツ科学、スポーツ実技の継続的实施。ポスターセッションや研究授業の公開。 |
| 成 果 | ・教科内で話し合いを持ちながら「体づくり運動」「体育理論」の授業展開ができた。 |
| 課 題 | ・多少、授業内のケガが発生している。 |
| 改善策 | ・準備運動等を徹底する。また、生徒の体力が低下している傾向があるため、より基礎的な活動を中心に授業内容の見直しを行う。 |

〈家庭科〉

| | |
|-----|---|
| 取 組 | ・生徒が主体的な学びを行えるような授業実践を図る。 |
| 成 果 | ・家庭基礎では、神奈川県発行誌「JUMP UP」を用いて消費者教育に取り組み、被害の具体例等から実生活に活かす学びに繋がった。 |
| 課 題 | ・生徒の基本的な知識や技能の実態に合わせて、実習内容の精選や授業展開の工夫が必要である。 |
| 改善策 | ・実生活から自身の課題を見出し、生活の改善に向けて知識や技能の向上を目指した授業・実習を工夫する。 |

〈芸術科〉

| | |
|-----|--|
| 取 組 | ・課題の内容や設定を多くの生徒が興味を持って取り組めるよう、工夫した。 |
| 成 果 | ・生徒たちが分かりやすく、また、興味を膨らまして授業に参ることができた。 |
| 課 題 | ・興味関心を持って取り組んでいる生徒がいる一方で基本的な知識や技能の習得が不足している生徒もいる。授業内容の設定、展開の更なる工夫が必要である。 |
| 改善策 | ・課題の設定などを今まで以上に工夫して授業に取り組みたい。 |

※外国語科は「国際学科」、商業科は「商業科」を参照。

□特別活動・部活動の状況

(関連アンケート番号：教職員 7、8、生徒 2、3、保護者 3、4)

| | |
|-------------------|--|
| <p>取 組</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒会や各局（委員会）の活動に関しては、教職員の指導のもと計画的、主体的に取り組めるようにする。特に体育祭や文化祭等の行事は、クラスを主な単位として、全校生徒が積極的に参加できるよう、生徒会本部役員を中心に積極的に活動できるようにする。 ・部活動については、各顧問の指導のもと、生徒が主体的に活動できるようにする。 ・地域との交流・連携を深める活動に、いろいろな場面で取り組んでいく。 |
| <p>成 果</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒会本部役員の引き継ぎも円滑に行われ、行事への計画的、積極的な取組がみられた。（生徒 3、保護者 4、職員 7） 役割分担の公平化の工夫を行った。 ・部活動については、運動部、文化部ともに、熱心に活動を続け、全国大会、関東大会の場でも入賞等の活躍ができた。 ・桜まつりや南まつり及び Y 校祭等でも地域との交流ができ、Y 校祭では 8 千人近い来校者を迎えることができた。 |
| <p>課 題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・学校行事では、特に LHR 計画において、生徒会行事計画と他の分掌の行事の調整が課題である。また、体育祭の種目の検討、球技大会の内容・日程の検討も必要である。 ・部活動では、予算が十分に確保できないことや、部活動指導員が十分に配当できず、専門性の高い部活動の指導に困難が生じているなどの課題があり、検討する必要がある。 ・Y 校祭等の準備などで、服装指導・著作権保護の指導がまだ不十分であることが課題である。 ・31 年度へ向けてクラス店舗の発注数など、さらなる検討が必要である。 |
| <p>改善策</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒会の行事計画の中で、LHR の内容の計画を、他の分掌や学科等と早い時期にきちんと調整する。 ・実態に合わせた部活動指導員の増員をお願いすると同時に、各部に不公平感のない予算等の援助を考える。 ・Y 校祭の事前の指導で服装のありかた・著作権保護について共通理解がとれるように、方法を検討する。 ・30 年度の反省を生かせる引き継ぎ体制を整える。 |

□生徒指導・教育相談の状況

(関連アンケート番号：教職員 9、生徒 4、5、9、保護者 3、5)

| | |
|-----|--|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の高い意識と共通理解のもとに指導に当たり、全教職員で情報を共有し、規範意識の向上に向けた効果的な声掛けを行っていく。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・盗難、登下校中の事故等が発生している一方で、茶髪、トレーナー、スウェット、派手なセーターなどの服装の乱れが規範意識の低下をもたらしている。生徒の学校評価では78%が「教職員に相談しやすい」と思っているので良好な関係を構築しつつ、さらに指導の強化を進めていくべきと考える。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・規範意識の向上を呼びかけているにも関わらず、指導が入りにくい現状がある。生徒と教職員の関係を崩さず、より良い規範意識の定着を目指す必要がある。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・登下校の制服着用は朝のあいさつ運動などできめ細やかに呼びかけを行っていき、自ら着たくなるようなデザインに変えていく必要がある。校舎内での防寒着は学校指定のセーターを取り入れるなど、抜本的な改革が必要であると考えます。 |

□進路指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 10、生徒 1、6、保護者 6)

| | |
|----|---|
| 取組 | <p>① 2年生全体には進路の日を設け、各種試験を実施するなどして就職に対する理解を深めさせる。また、2年生の就職を希望する生徒に対しては就職学習会を通して職業人になる自覚を求める指導をする。3年生には毎週、社会に求められる人材となるようきめ細かな指導を行う。また、内定後も卒業時までの間、社会人になるための指導として就職セミナーを5回実施する。</p> <p>② 各学年担当者を中心に、各学年の進路ニーズに対応した取り組みを導入し、進路ガイダンスがより効果的になるように運営をした。特に30年度は3年生5月に行った進路の日を2年生2月に設定し、9月のスタディーサポートの全体実施を見送った。3年生ではSLの時間を利用し、生徒個々のニーズにあわせたプログラムを運営した。</p> |
| 成果 | <p>① 9月に始まった1社目の就職試験で92%の生徒が採用内定を決め、11月の時点で就職を希望する生徒全員が内定を受けた。</p> <p>② 「あなたは進路説明会等で進路に関する情報を十分に理解できましたか」(生徒6)で「そう思う+ややそう思う」の数値が81%と高い状態を維持している。特に2年生で83%と高く、進路ガイダンスや進路の日への取り組みが効果をあげている。</p> |

| | |
|-----|---|
| 課 題 | <p>①現代の企業は、課題設定と課題解決能力を備えた意欲ある人材を求めている。経営者と一緒になって企業の課題を見つけ、そしてそれを解決できる人材の育成にさらに取り組み、1社目での内定率をさらに高められるよう、2年生の早い段階からキャリア教育を充実させる必要がある。また、3年生では途中から民間を希望する生徒への短い期間での就職指導や時間割上同時間帯に活動できない生徒への工夫が求められる。</p> <p>②生徒の回答6で、「そうは思わない」が3年生になると5%と最も高くなる。自分の進路がより具体的になり、課題が明らかになると、不足する情報や知識が明らかになるためだと考えられ、より個々に対する必要な情報提供が必要である。また保護者の回答6「希望進路に応じた情報の提供があり、適切な指導が行われていると思いますか」で「わからない」が1・2年生ともに17%と高く、保護者に理解されていない。3年生では4%と低くなるが、低学年からも保護者に対しての情報提供が必要である。</p> |
| 改善策 | <p>① 受験を目指す個々の企業研究以外に、日々刻々と変化する現代企業の求める人材像も研究させる。常日頃から就職指導に重点を置くとともに、1・2年生へのキャリアプランニングに工夫を凝らし、3年間を通しての進路指導体制をさらに充実させていく。</p> <p>② eポートフォリオへの取り組みなど、新制度の大学入試制度にあわせて、生徒に対する意識づけを早期から行う。また2年生に導入した進路の日の設定や、体験型の進路ガイダンスなど、新しい取り組みも継続して実施し、その効果の検証も行う。また保護者に対する進路説明会も従来通り行うが、その内容をより精選してわかりやすいものになるよう検討する。</p> |

□保健指導及び環境美化の状況

(関連アンケート番号：教職員 11、12、生徒 7、8、保護者 7、8)

| | |
|-----|--|
| 取 組 | <ul style="list-style-type: none"> ・30年度より健康診断の結果を面談時に返却し、家庭でも生徒の健康状態に関心を持ってもらう機会を提供した。 ・美化委員として地域清掃やゴミ収集当番で美化環境に対する意識づけを高めた |
| 成 果 | <ul style="list-style-type: none"> ・「学校は生徒の健康管理について適切な指導をしていると思いますか」(生徒7)の結果より8割弱の生徒が肯定的であった。 ・「学校は資源リサイクルや環境美化について積極的に取り組んでいますか」(生徒8)・「本校は環境美化に力を入れ、校内の教育環境がきちんと管理されていると思いますか」(保護者8)については、肯定的意見であった。日々の地域清掃活動や大掃除等で意識が高まっている結果であると思われる。 |

| | |
|-----|--|
| 課 題 | <ul style="list-style-type: none"> ・「生徒の健康管理に関する適切な指導が行われていると思いますか」（保護者7）の結果について、生徒は肯定的であったが、保護者は6割程度にとどまっているので、保護者への働きかけの工夫が今後の課題である。 ・美化清掃やゴミの分別への環境意識は高まっているが、ゴミの減量化へ対する習慣づけが課題である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・今後も健康診断の結果の返却は継続し、よりわかりやすい資料を提供して保護者にも生徒の健康状態に関心を持ってもらえるよう、さらに工夫をしていく。 ・美化委員会を中心に、日々の清掃活動から声掛けを行うなど、ゴミの減量化へ対する意識を持たせる。 |

3 学校経営の状況

□教育目標等の設定・実施状況

（関連アンケート番号：教職員13、生徒9、保護者1）

| | |
|-----|--|
| 取 組 | <ul style="list-style-type: none"> ・各学科の教育目標に沿って、生徒一人ひとりの個性を尊重しながら、ビジネス教育・国際理解教育を進め、マネジメント能力・コミュニケーション能力等の育成を図っている。また選択科目の配置についても科目配置を調整し、生徒の要望に応じている。 |
| 成 果 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒・教職員による学校評価において、質問項目「本校生徒であることを誇りに思う」、「学校教育目標の実現に向け、全教職員が取り組んでいる。」では満足できる評価が得られている。これは教職員が生徒に寄り添った学習指導、生活指導を行っていることが要因と考えられる。 |
| 課 題 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒、保護者からの要望意見として、授業の進め方、授業での話す速さについて、一般受験向けの選択科目の設置等の希望が例年出されることが課題である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの自由記述意見を供覧し、自分に対する意見として受容し、授業改善に取り組む。多様な進路選択に幅広く対応できるように選択科目を配置していく。 |

□組織運営及び教職員研修の状況

(関連アンケート番号：教職員 14、15、16、17,18)

| | |
|-----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・教職員が互いに研鑽し力量を高め合える環境を整え、意欲を持って業務に取り組み、達成感を味わうことができる職場づくりを進める。特に、職員の協働力、同僚性を高め、経験年数の少ない教職員の育成に取り組む。また、生徒に対して個別の指導をできるよう、生徒理解研修、危機管理研修を実施する。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・教職員が研修を重ね、少しずつアレルギーや疾病、感染症に対する知識が向上し、AEDの使い方やアナフィラキシーショック等の場面に対応する力や安全配慮等の意識が向上したと感じる。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・教職員への質問項目「教職員が互いに研鑽し、力量を高めることができるように、校内の研究・研修体制が整えられている」に対して「おおむね実現できている」の回答が70%を割り込んでいることが、課題である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業力の向上に向けた取り組みを共有する機会を設け、教科を超えて授業を見学し意見交換ができるような研究委員会を設けることで教職員の自主的な研修の場を設置していく。 |

□学校経理、施設・設備及び情報の管理状況

(関連アンケート番号：教職員 19、20、21、22、生徒 10、11、保護者 8、9)

| | |
|-----|--|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会より配当された予算に対し優先順位をつけながら適切に執行および管理を行う。 ・良質な教育環境、学校生活に資するため、老朽化しつつある校舎の維持管理に努める。 ・樹木剪定や校内清掃を通し、学校環境の維持管理を行う。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・老朽化が懸念されている油圧エレベーターの更新に関し、予算措置がなされたため、架け替えが実現した。 ・校名入り封筒の自作やOA機器の統一化による消耗品の共有化を図ることで経費節減を行い、配当予算の適正な管理に努めた。 ・夏場の樹木剪定のほかネットなどの小破修繕を自前で行い、経費節減を図りながら校地・校内環境の維持を行った。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・老朽化が進行しつつあるが、大型補修などは全学校の中で優先順位をつけられるため、要求通りに教育委員会事務局から予算が下りず、引き続き厳しい施設管理が求められている。 ・広い校地に比例し、夏場の下草刈りが非常に困難である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・緊急性の高い施設修繕には適切に予算措置がなされるよう、引き続き教育委員会と連携していく。 |

□保護者・地域等との連携協力状況

(関連アンケート番号：教職員 23、24、生徒 13、保護者 10)

| | |
|------------|--|
| <p>取 組</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・保護者との連携 1. 年 3 回発行される PTA 広報委員会による「PTA だより」は学校の教育活動を保護者へ伝える媒体として貴重なものであるから、その内容の充実を図るための連携協力をする。 2. PTA 成人委員会による「施設見学会」、その他の企画は保護者の学校理解のために有効なものであるから、協力・連携をする。 3. Y 校祭での PTA の活動の場であるバザーや無料休憩所の企画運営に協力する。 4. Y 校おやじの会による月 1 回の環境整備活動や教員との交流、ソフトボール大会、南太田小学校と蒔田中学校の PTA と連携しての大岡川沿いの清掃活動に参加、協力する。 ・地域との連携 1. 「わがまちの学校づくり推進会議」を通じて、地域との連携に引き続き取り組む。 2. Y 校祭においては、生徒会の「地域交流局」の生徒の協力のもと、地域ステージ発表や南区スポーツ推進協議会による「さわやかスポーツ」を実施する。 3. 南区のイベント（南まつり・桜まつり）へ参加する。 4. 地域清掃を大掃除及び美化委員会による特別清掃活動として行う。 5. 国際学科の生徒による南太田小学校「英語教室」での交流を行う。 6. 商業科の生徒による「老人クラブ・パソコン教室」を行う。 7. スポーツマネジメント科の生徒による「Y 校カップスポーツ G O M I 拾い大会」を行う。 |
| <p>成 果</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・保護者との連携 「PTA 活動が十分保護者に理解され円滑に運営されている」（教職員 23）の高い評価に見られるように、本校の PTA 活動をはじめとする保護者の諸活動が、教職員との連携協力のもと活発に行われた。 ・地域との連携 「学校の教育活動の情報提供・説明が十分になされ、活動に対する理解が得られている」（教職員 24）の高い評価に見られるように、1. 「わがまちの学校づくり推進会議」を通じて、地域との連携に引き続き取り組んだ。2～7 の取組に対しては多くの地域の方々のご協力、ご参加のもと成功裡におこなうことができた。 |
| <p>課 題</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ PTA 活動の発信に際し、より一層「個人情報取り扱い」に注意することが課題である。 ・ 「横浜商業高校らしい地域連携活動」を、地域の方々にさらに理解していただくことが課題である。 |

| | |
|------------|---|
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・「個人情報の取り扱い」に万全を期することを課題とし、特に「Y校 P T A だより」の内容を含め編集方針などを再検討する。 ・ホームページをさらに活用し、地域への情報発信を密にする。 |
|------------|---|

□危機管理状況

(関連アンケート番号：教職員 25、26、生徒 12)

| | |
|------------|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・運動時における安全の確保、疾病、事故、事件、不祥事防止等の研修を幅広く実施し、職員の意識向上と対応力を高めた。さまざまな事例を教職員で共有した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の危機管理意識は高い結果が数字に表れている。さまざまな事例や研修の結果、職員から学年・分掌等に相談後、経過を整理し管理職に報告され、連絡体制が構築することができた。これは事案に対して、組織的に対応し全体に報告して情報を共有したためである。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の「災害時の避難経路を知っていますか」に対する「知っている」が依然として 50% 台であること。併せて津波発生時の避難場所の周知も課題である。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・避難訓練時やホームルーム、学校行事等で防災意識を高める。校舎屋上及び清水ヶ丘公園への避難訓練の導入していく。 |

□学校に関する情報公開の状況

(関連アンケート番号：教職員 27、生徒 13、保護者 10)

| | |
|------------|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・29年に続き発信の頻度向上と、発信すべき情報と発信方法について考察を行なった。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・月間予定、生活関連指導情報を保護者向け WEB ページにアップすることで合意形成に至った。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・部活動ページに関する情報更新への不満が 29 年度に引き続きある。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・すべての部活動の活動成果を逐一紹介する期待に答えることは、現実的でない。部活動ページは固定し、トピックスの中に集約する。 |

4 いじめへの対応に関する項目

□いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28、生徒 5、保護者 3)

| | |
|-----|--|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none">・生徒と学校職員一人ひとりにアンケートを実施し、その集約と結果に基づく行動の協議と全校生徒、全職員へのフィードバックを行った。・毎月の定例会において情報交換を実施した。・市立高校生徒指導運営委員会主催のSSW研修会においていじめ対応のノウハウを学んだ。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none">・透明性のある調査とフィードバックができた。・協力してできた。・全職員が参加できなかった。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none">・アンケートの趣旨と質問内容の受け取りに齟齬が生じた。・毎月、第一月曜日の6校時を開催日としていたが、学年会を経て行うことができない月があり、日程の調整が困難である。・自校主催の研修会の実施。 |
| 改善策 | <ul style="list-style-type: none">・職員間での共通理解を図る。・事前に学年主任に聞き取りをお願いするなどし、報告日に間に合うよう開催していく。・予算立てや講師派遣の依頼を活発化していく。 |